

五箇山の伝統や文化、自然を活用した 「総合的な学習の時間」の実践

学校名 富山県立南砺平高等学校

所在地 〒939-1912
富山県南砺市大島1203

ホームページ
アドレス <http://taira-h.el.tym.ed.jp/wp/>

1 研究の背景と目的

世界遺産「五箇山の合掌造り集落」が隣接する本校では、平成17年から22年まで「総合的な学習の時間」を使って、地域総合や地域文化、地域文芸として、地域の方を講師に招いて五箇山の歴史や文化について学んできた。実際に授業を進めていくなかで、五箇山に関する伝統や文化、自然をまとめた記録は本などの資料が多く、より多くの人に情報を発信するためにホームページを利用した情報発信が求められている。平成23年度からは「五箇山研究」として研究を行い、1年生を対象として地域に伝わる郷土芸能の調査、研究および技術の習得を目的に「五箇山研究Ⅰ」を行った。また、平成24年度からは2年生において、選択で生活や文化を歴史的視点から調査、研究する「五箇山研究Ⅱ」と自然環境を調査、研究する「五箇山研究Ⅲ」に分けて行うこととなった。

五箇山研究Ⅰでは、多くの生徒が所属する郷土芸能部の活動とは別に郷土芸能の踊りや唄について調べる。さらに五箇山民謡の歴史的・生活上の背景などを地域の住民に聞きに行ったり、文献などを調べたりすることを通して郷土芸能への理解を深め、伝承していくことの意義について学ぶことが目的である。

五箇山研究Ⅱでは、五箇山の生活の歴史について調べる。現在、古くから伝わっている文化・伝承の多くが失われつつあるほか、合掌造りの生活と現代の生活との共存という課題も抱えている。この五箇山ならではの生活様式を後世に伝えるため、経験豊富なお年寄りをはじめ、広く地域の人々から暮らしの様子を聞き取り、それを視覚的な情報として保存することで、地域理解と日本の伝統文化を継承していくことを目的とする。

五箇山研究Ⅲでは、学校周辺の自然環境を調べ、地域固有の生き物や気候変化などの特徴を学ぶことから、自然の大切さを理解するとともに、環境を守る有用性を学ぶのが目的である。

また、五箇山研究全体を通して、地元の五箇山を愛する心の育成や、年配の方との交流を通して対人関係能力や会話能力の育成、パソコンなどの機器を用いて調べる力や情報発信する力の育成を目指している。

2 実践内容

(1) 五箇山研究Ⅰ

研究は2部構成であり、前半は、①調査・研究主題を設定、②文献やインターネットを利用した調査、③調査したことを裏付けるための聞き取り（フィールドワーク）、④調査・研究のまとめと発表、である。研究の後半は、①地元民謡の踊りと楽器の習得、②郷土芸能発表、である。特に、前半で学んだ事柄を基盤として後半の研究に進んでいくことが大切であり、踊りが上手に踊れる、楽器がうまく使えるだけでなく、民謡の歌詞の意味や時代背景、先人の思いなどを意識した取り組みが重要であることを認識させた。

研究の前半（一部抜粋）：

（2班）「麦屋節」の種類・歌詞について

「長麦屋」・・・麦屋節（平と城端の踊りの違いは何か）

「文句入り麦屋」・・・文句入り麦屋（踊らない理由はなぜか）

「小谷麦屋」「早麦屋」・・・麦屋節の種類（なぜ何種類もあるのか）

7月27日（金）長谷川さん（城端）に訪問して、五箇山と城端の「麦屋節」の相違点や類似点、双方の歴史などについて聞いた。

（3班）「目蓮尊者地獄巡り」について

目蓮尊者地獄巡り・・・

歌の起こり、歌詞、1年間に歌われる時期

7月19日（木）竹中さん（新屋）に訪問して、「目蓮尊者地獄巡り」の歴史や歌い方、踊る時期などについて聞いた。



生徒たちの多くは、インターネットや書物で調べることは違い、実際に民謡に携わっている方々の声を聞いて、「説得力がある」「民謡の保存、伝承の大変さがわかった」などの感想を述べていた。また、積極的にお年寄りに質問している様子が印象的であった。

資料の整理はWordやExcelで用い、発表会はPowerPointで行った。ほとんどの生徒がこれらのソフトを扱うことに慣れておらず習得に時間がかかった。情報の授業だけでは時間が不十分だったため、放課後等を活用することで補った。また効果的な発表となるように外部から講師を招いて技術の向上をはかった。

各班の研究成果をクラスで共有するために発表会を行った。発表はPowerPointを用いることとし、特定の個人が一人で発表してしまわないよう全員が関わるよう注意した。

次に各班が調査したものの中から優秀なもの（興味深いもの）を2つ選び学園祭で発表した。学園祭は公開であるため地域の方々も見学されていた。クラス発表とは違って一般の方々も相手とするため生徒は緊張していたが、この体験はとても貴重なものとなった。



研究の後半：

地元保存会の方々に講師に招き実技練習を行った。演目は五箇山民謡で代表的な「麦屋節」、「こきりこ唄」、「お小夜節」、「早麦屋」である。楽器の演奏と踊りの3班に分かれて、ローテーションで行った。計10時間程度の練習であったが、その都度保存会の方々が指導されるため上達は早かった。また、練習の様子をタブレット撮影して確認したり、郷土芸能部に所属している生徒が積極的に遅れている生徒を指導したりしたため、とても充実したものとなった。「総合的な学習の時間」最終日には学年発表を行い、練習の成果を披露した。

研究の考察と課題

五箇山地方は民謡の宝庫であり、その数は100以上あると言われている。しかし、祭りや各種行事で実際に唄ったり、踊ったりされているものは少なく、多くのものが忘れ去られようとしている。全国的に少子

高齢化が進み、ここ五箇山地方では過疎化も問題になってきている。このままでは伝統文化が時代とともに消えてしまう恐れがある。生徒は調査・研究を進めていく過程で、先人が残したこの貴重な文化を継承し守っていくことを感じてくれた。また地域のお年寄りに直接話を聞いたりしたことで、人を敬う心が育成され、コミュニケーション能力も高まった。更に同じ民謡でも地域によっては踊りなどが違って伝承されたりしていることが確認できた。そのルーツを探ることで当時の時代背景、人の思いを生徒は知ることができた。

五箇山民謡に関する文献は非常に多くある。生徒の多くは地元五箇山以外出身の生徒であり、知識がほとんどないため文献等のコピーに終始することが懸念された。しかし、資料の整理技術習得に ICT 機器を活用したこと、フィールドワークを行ったこと、などが生徒の意欲を喚起し効果的な学習活動となった。今後 ICT 機器を使いこなせるようになれば活動が活発となるだけでなく、いろんな視点で物事を見られるようになることが期待できる。実際に生徒の中には「もっと ICT 機器が使えるようになりたい」「動画撮影がしたい」等の意見が多く、今後の活動が楽しみである。特にタブレットは手軽に、どこでも利用できることからとても有効なツールである。指導者の指摘が具体的にわかるとあってとても効果があった。

(2) 五箇山研究Ⅱ

①テーマ決定

白川・菅沼の各合掌集落、図書館に出掛け、テーマ探しを行った。興味・関心の持ったものはすべてカメラ等で記録するとともに、インターネットで事前に合掌集落のマップを用意しておいた。また、タイミング良く屋根の葺き替えを行っており、その作業の様子を見た。集めてきた情報は KJ 法で整理し、各班のテーマを決定した。

・研究内容

(1 班) 世界遺産のモニュメントプロジェクト

(2 班) 合掌造りの間取り

(3 班) 放水銃と過去の火災の因果関係

(4 班) 現代に伝わる五箇山・白川の食

②フィールドワーク

(1 班) 五箇山だけに存在するもの、景観を保持するものを探す。

(2 班) 合掌造りの中を見学し、住民に質問する。

(3 班) 放水銃の中身、個数を調査する。地元消防署に出向き、話を伺う。

(4 班) お土産屋で食べ物を探したり、試食したりする。レシピを作る。

③資料・記録のまとめ

フィールドワークを通して得られた情報を Excel や Word、PowerPoint を用いて整理した。裏付けなどが必要なものはインターネットや書籍を用いて行った。実技を伴う 4 班は地元の商店に向いて技術の習得にあたった。



④発表会準備

発表は PowerPoint で行うため、事前に効果的な使用方法、プレゼンテーションの講習を行った。また、展示用の資料を B0 ポスターで作成した。

⑤発表会

クラス発表会、全体発表会（学園祭）を実施

クラス発表は PowerPoint を用いて行い、全員が話す機会をもつようにした。また、クラスの中から優秀なものを2点選び学園祭で発表した。また他の五箇山研究の資料とともに展示し、地域の方々に公開した。



発表例

研究の考察と課題

生徒は今の便利な生活に慣れきっており、過去の生活様式等に興味・関心を持つことが無いためテーマ決定が難しかった。またテーマが決定してもどこに焦点をあて、何を問題にするかが明確でなかった。この点教員の助言が必要となるが、ともすれば教員側が興味・関心のある内容になってしまう危険性があり、生徒の意思をどのように尊重してゆくかが今後の課題である。同じ研究テーマでも調査の方法や切り口を変えるなどすればより深い研究になるものと思われる。合掌造りは景観こそ保護・継承されているがそこに住む人々の暮らしはどんどん変わってきており以前のものではない（たとえば養蚕とかは行われていない）。この遺産を守っていくために多くのものを我慢する必要があるため、住む人の苦勞が忍ばれる。今回暮らしがどう変化したのか調査できなかったが、合掌造りを知る上で重要なヒントになると思われる。また、世界遺産として脚光を浴びる中、今後我々がどのように貢献できるかこの機会に考えさせてゆきたい。

発表方法についてはプレゼンテーションと展示の2本柱としたが、プレゼンテーションでは全般的に説明のポイントが明瞭でなく、話し方も一本調子であり課題が残った。生徒のプレゼンテーション能力の向上には教える側の技術向上が不可欠であると思われる。また話す対象によってどのように展開していけばよいのかも学んでゆかなければならない。

（3）五箇山研究Ⅲ

①研究内容、手順の確認

全体テーマ・・・五箇山生物図鑑作り

タブレット型パソコンを用いた電子図鑑を作成する。

（A 班）学校近辺の動物（昆虫・動物）の生息調査及び図鑑作成

（B 班）学校近辺の植物の生育調査及び図鑑作成

昆虫の生息状況については学校および生徒寮周辺とした。昆虫の中には幼体時に水中で成長するものが多いことから小川での調査を行うことにした。動物については民家のあるところでは見つけにくいので、近くの山々で観察を行うことにした。植物調査は主に学校周辺とし、地形調査を平行して行うことでその関連を調べることにした。

②フィールドワーク

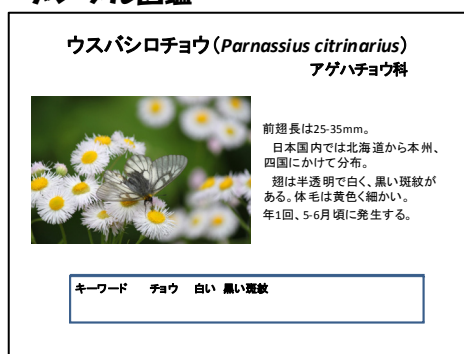
(A 班) 生徒寮近くの小川で水生昆虫の採集を行った。ここでは数多くの生き物が生息しており、自然の豊かさを感じた。しかし調査をしてみると、動物は思うように目の前に現れてくれず、短期間での調査は困難であった。動物等を観察するときは望遠デジタルカメラを用いた。

(B 班) 学校近くにおいて、日照と植物の関係を調査した。代表的な植物の葉脈標本を作り、ラミネート加工した。さらに五箇山地方は蜘蛛の種類も豊富なので、その生態を調査した。

③資料の整理、標本の作製、デジタル図鑑の作成



デジタル図鑑



④発表会・・・クラス、全体（学園祭）

五箇山研究Ⅱと合同で行った。発表方法等は五箇山研究Ⅱと同じである。

研究の考察と課題

以前平野部では当たり前に見ることができた動植物が、宅地開発やほ場整備などで多くの種類が見られなくなった。ここ五箇山地方にも開発の手は及んでいるが、今なお多くのものが残っていることが確認できた。今回の研究によって自然を守り、継承する心が養われたが、研究を充実させてより明確なものにしてゆきたい。そのためには比較的メジャーなもの（観察しやすいもの）だけでなく、あまり知られていないものにも積極的に取り組まなければならない。また研究内容をホームページで公開、デジタル図鑑を活用した授業、地元小中学校と情報を共有することなどが考えられ、本校が自然保護の先頭に立って行動することを考えていきたい。

3 研究全体の成果と今後の課題

これまで多くの生徒は五箇山に対して特別な感情は持っていなかった。自然の豊かさを感じることも無ければ伝統文化への思いも希薄であった。しかし今回の実践で一番の成果は生徒が五箇山を好きになってくれたことである。豊かな自然、民謡を始めとした多様な伝統文化など調査項目がたくさんあるため、生徒は飽きずに活動できた。また調査結果を共有したことがより五箇山を身近にしたと考えられる。今後更に調査を続けることでふるさとを愛する心が育つことを期待でき、高校生活を充実したものしてくれるのではないだろうか。

班活動やお年寄りへの調査などフィールドワークもとても効果的であった。協力してことに当たる姿勢、人を敬う心も十分に養われた。また各種 ICT 機器を用いたことで活動が積極的になり、大変効果的であった。今後ハード・ソフト両面での技術習得、プレゼンテーション技術を向上させれば更なる効果が見込まれる。

今多くの生徒がスマートフォンを所持しており、タブレット等の使用を前向きにさせていると思われる。今回の実践を通して ICT 機器の活用が生徒を意欲的に学習活動に取り組ませる有効な手段であることがわかり、今後の授業実践に活かしてゆきたい。

参考文献

- ・五箇山の民謡集（高桑敬親 著）
- ・五箇山（宮崎重美/池端滋 著）
- ・富山民族の位相（佐伯安一 著）
- ・愛しの合掌集落（柴田英司 著）
- ・五箇山民俗覚書（石田外茂一 著）
- ・鑑定図鑑 日本の樹木（三上常夫 著）
- ・葉実種皮で確実にわかる樹木図鑑（鈴木康夫 著）
- ・昆虫の図鑑 採集と標本の作り方（福田春夫 著）